

静岡県

図書館協会

会報 No.64



函南町立図書館（平成25年4月開館）

編集・発行 静岡県図書館協会

静岡市駿河区谷田53番1号
静岡県立中央図書館内

平成25年度 第21回 静岡県図書館大会

「伝えよう図書館の力 広げよう新たな可能性」



第21回となる平成25年度の静岡県図書館大会は、10月28日（月）静岡市駿河区のグランシップを会場に、1,020名の参加者を集めて開催されました。

大会は、曾我廣秀大会運営副委員長（浜松市立中央図書館長）の司会により、大澤眞明県図協副会長（静岡市立中央図書館長）の開会の言葉で始まり、谷野純夫県図協会長（県立中央図書館長）の挨拶の後、大須賀淑郎副知事から祝辞をいただきました。

続く表彰式では、「読書県しずおか」づくりにおいて意欲的な活動が評価された学校・団体、長年にわたって図書館業務に携わり功労のあった図書館職員及び熱心な活動のあった優良読書グループが表彰されました（敬称略）。

その後、日本図書館協会常務理事の小池信彦氏による情勢報告があり、図書館の設置及び運営上望ましい基準等図書館をめぐる状況についての説明がなされました。

午前の最後に行われたライブトークでは、「図書館とまちづくり ～地域を元気にする図書館とは～」をテーマに、大串夏身氏（昭和女子大学人間社会学部特任教授）をコーディネーター、パネリストに平賀研也氏（長野県伊那市立図書館長）と花井裕一郎氏（NPO法人オプセリズムCEO）と鳥谷部綾香氏（静岡県立大学若者エンパワメント委員会代表）を迎え、実際に図書館で行った事例を元に今後の地域の活性化につなげる図書館の情報発信などについて意見が交わされました。

午後は、7つの分科会に分かれ、各テーマ別に様々な講演や報告等が行われました。

なお、表彰された方々は、次のとおりです。（敬称略）

☆「読書県しずおか」づくり優秀実践校・団体（者）表彰

- ・小学校の部 牧之原市立相良小学校
- ・中学校の部 静岡市立東豊田中学校
- ・高等学校の部 静岡県立藤枝西高等学校
- ・特別支援学校の部 静岡県立御殿場特別支援学校
- ・団体（者）の部
 - 伊東図書館おはなし会（伊東市）
 - おはなしペンギン（静岡市）

☆全国公共図書館協議会表彰

- 安達 めぐみ（元静岡県立中央図書館協議会委員）
- 吉住 幸子（元静岡県立中央図書館協議会委員）

☆静岡県図書館協会表彰

- 勝又 美路子（元裾野市立鈴木図書館協議会会長）
- 高井 さとい（富士市立東図書館）
- 福澤 まゆみ（富士市立図書館富士文庫）
- 渡邊 友美（静岡市立蒲原図書館）
- 鈴木 登次（元焼津市図書館協議会会長）
- 外岡 玲子（南伊豆町立図書館）
- 村上 真佐子（静岡大学附属図書館）
- 森 裕子（東海大学短期大学部図書館）
- 渡井 和美（東海大学短期大学部図書館）

☆優良読書グループ表彰

- ・(社)読書推進運動協議会長賞
 - チリンの会（富士市） 代表 吉野 了子
- ・静岡県読書推進運動協議会長賞
 - 読み聞かせ実行委員会（熱海市）
 - おはなしの会 おひさま（富士市） 代表 芝田 敏子
 - おとぎのへや（富士宮市） 代表 森川 めぐみ
 - ねこバス（静岡市） 代表 望月 さとみ
 - 水ようおはなし会（菊川市） 代表 三浦 康子
 - 点訳サークル 六つの星（掛川市） 代表 鈴木 江美子



表彰式の様子

ライブトーク（抜粋）

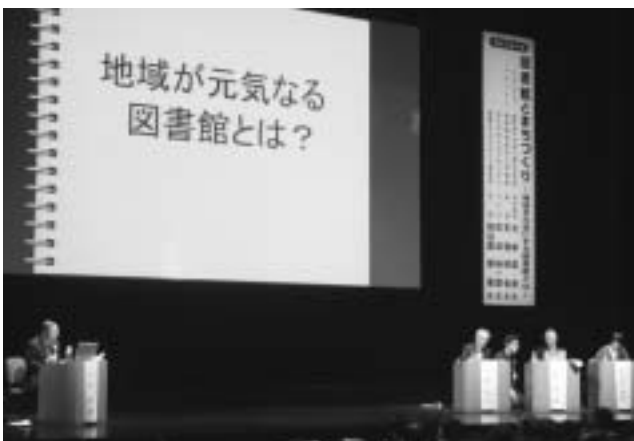
大串 本日のテーマは「図書館とまちづくり」ということで、地域を元気にする図書館についてお話をします。

【長野県伊那市立図書館の取り組み】

平賀 図書館総合展でのlibrary of the year 2013優秀賞で、伊那市立図書館の取組の『高遠ぶらり』が評価されました。高遠ぶらりプロジェクトは、携帯端末にデジタル古地図を写し、それに様々な情報を載せていくというアプリケーションです。図書館だけではなく、市民、博物館などいろいろな方が参加し、共同で情報を集め、作成しています。学校、地域の俳句の研究グループ、国土交通省、さらに高遠藩とゆかりのある友好都市提携先の新宿区の四谷図書館とも一緒に進めています。デジタルアーカイブは図書館だけではなく、地域の皆と作り、図書館はそのお手伝いをすればよいと考えています。

【小布施町の取り組み】

花井 一番大事にしているのは「まちじゅう図書館」です。古本市で本がある楽しさを地域が実感した上で始めました。「まちじゅう図書館」は、本を好きな人のコレクションは一つの地域のアーカイブであり、それをその人がいる場所で棚ごと展示したい。そこで、その人の家の玄関に本棚を出してほしいというお願いを始めました。今は17軒です。「交流と創造を楽しむ文化の拠点を作る」ということが私たちの理念なので、交流を作っていたなく、「まちとしょテラソ」という図書館が何かをするのではなく、そこに来た人が、直接その人と話をし、借りたい人は人情で借りて行って次に会う約束をする。図書館に来るだけではなく、地域を図書館として考えればいろいろなことができると思います。この「まちじゅう



大串夏身氏、平賀研也氏、花井裕一郎氏、鳥谷部綾香氏

図書館」を東北、離島にも広げられるように一生懸命活動しています。寄付等、ご協力いただければうれしいです。

【全国の図書館の取り組み】

大串 図書館は静かにするというイメージがありますが、山梨県立図書館、東大附属図書館、明治大学和泉図書館は人が集まり、話ができる交流スペースを設けています。

長崎市図書館は病院等と協力しながら、地域の医療情報の提供を行っています。愛媛県立図書館は行政の福祉関係と一緒に読書を通じた町づくりを行っています。また、福岡県立図書館は場所が郊外で住宅地にあるので、児童サービスに先進的な取り組みをしました。図書館は地域の希望を受けるだけではなく、人と人との交流を作り出すことが大事です。

【地域を元気にする図書館にするために】

平賀 図書館に行けば、情報や人など何かにつながるということが期待を作りたいです。そのためには、館長や企画担当は、中で待つだけではなく図書館の外へ行くのが第一歩だと思います。

花井 今、図書館はファンづくりしかないと思います。「まちとしょテラソ」は3年前から子どもハイハイの運動をしています。図書館でのおしゃべりはOKで、未就学児はスキップ、小学生までは第一ダッシュもOKです。それらは彼たちの言葉だからです。子どもたちが生き生きと活動し図書館で何かできるという意識で成長し、その意識が次世代につながっていくとよい思います。

鳥谷部 静岡県立大学のYEC若者エンパワメント委員会で活動していますが、中高生から大学生など若い世代がもっと声に出して意見を言える社会を作ることがテーマです。子どもたちが図書館で何かできるという意識をもって成長していくのが、私達の活動YECの活動の目的と重なります。図書館に、広い世代の方が集まりますが、その中で若者たちが自然に集まる環境ができればいいです。

大串 図書館はそれぞれの自治体の条件や地域の人々の関係の中で作られるので、地域の中で知恵を出し合い、図書館を作っていくことが大事です。それを踏まえて、新しい時代の図書館づくりを皆で考え、図書館を育ててほしいと思います。

情勢報告（抜粋）

報告者 小池 信彦（日本図書館協会 常務理事）

図書館をめぐる状況について4点お話しします。1点目は学校図書館法の一部改正により学校司書の配置について規定するという方向性が出てきたことです。「子どもの未来を考える議員連盟の会」の総会において改正案が公表され、文部科学省等の関係機関でも動きが出ています。日本図書館協会では学校図書館部会を中心に検討チームを設けて、法改正に向けて検討しています。

2点目は『中小レポート』50年です。『中小都市における公共図書館の運営』が1963年に刊行されてから50年経ちました。このレポートに学ぶ図書館が、今の図書館を作ってきたと言えます。

3点目は、公立図書館の指定管理者制度です。日本図書館協会は、適用については慎重であるべきという立場ですが、仮に適用の検討をする時の参考に『指定管理者制度を検討する視点、一よりよい図書館経営のために』の試行版を協会webサイト「日本図書館協会の取組み」に掲載しています。同サイトには2007年から毎年図書館での導入状況や検討状況を調査して公表していますが、直営に戻した図書館も8館あります。また、全国市長会が発行する『市政』の9月号の市長の座談会における「図書館は様々な団体と連携するため、直営の道を選択する」という意見がこの問題を考える材料となると思います。指定管理者制度を導入した武雄市図書館については、日本図書館協会でも調査を重ねて意見を公表する予定です。武雄市図書館に行く際には近くの伊万里市民図書館も訪問してみてください。

4点目は「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」です。改正で私立図書館が加わったこと、図書館が「地域の情報拠点」という認識を持って地域の課題への対応したサービスをしていくこと、指定管理者制度の導入を検討するのであれば、継続性等のチェックポイントをクリアするのが条件ということ、館長の要件に市町村教育委員会も入り、運営の責任者の責務に変わっていること等がポイントです。日本図書館協会は、望ましい基準の解説を作成しています。

最後に、日本図書館協会は、8月に新公益法人への申請を行い、移行の手続きが進んでいます。今後、図書館員だけではなく図書館に関わる行政、市民、利用者、企業、団体の皆さんと図書館について議論し、実行していくことがよりよい図書館活動につながり、それが市民に役立つ図書館となっていくことを信じています。



小池 信彦 氏

分科会

第1分科会【図書館サービス】

「高齢化社会の図書館サービス
～利用者の願いと読書権保障に向けて～」

（参加者100人）

講師 ^{いらい かずひこ} 岩井 和彦 氏

（堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター所長）

図書館は、本当に情報を求めて支援を必要としている人々にサービスを提供できているのだろうか。障害者、高齢者など、図書館を利用しにくい人の側に立っての図書館サービスを考えるため、堺市健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター所長の岩井和彦氏に以下のような講演をしていただいた。

私は、人生の節目で「情報障害者」であることを感じてきたが、医療に関する情報は切実だった。現在、点字図書館は、求められる情報を求められる媒体で提供するつなぎの役割をしたいと頑張っている。図書館を利用できないと思っている人がいるとすれば、それは図書館にこそ何らかの障害があるのではないだろうか。例えば遠距離のため図書館に行けないというのは図書館利用における障害者であるとの認識が必要だと思う。文字の読み書きの不自由に関しては、点字図書館を作ればいい、教育は特別支援学校があればいいという日本の障害者施策は欧米諸国と大きく異なるところだ。

盲学校という特殊な環境の中で、閉塞感にさいなまれていた15歳の私は 弁論大会で次のように述べている。

「目が見えないだけで、なぜ社会から孤立してしまわなければならないのでしょうか。僕たちは文字の読み書きもしています。勉強もしています。生徒会活動も立派に行っています。それを社会の人達はどれほど知ってくれているのでしょうか。」

自分が大人になり、情報提供に関わる仕事に従事したいと思った原点がここにある。

「障害者権利条約」批准に向けての動きの中で、様々な分野での見直しが進んでいる。図書館利用に障害がある人に対して、拡大図書や音訳図書、代読サービスなど 何らかの方法で本を読む可能性を我々は追及していく必要がある。だからこそ、読書のバリアフリーを私達当事者側からどんどん言っていこうと思う。そして、公共図書館と点字図書館が連携し、すべての人が「あるがままに」「望む方法で」図書館サービスを利用できるようにできることから取り組んでほしいと願っている。



岩井 和彦 氏

第2分科会【乳幼児に対するサービス】

「赤ちゃん絵本とわらべ歌
～読んでみよう、絵本歌ってみよう、
わらべ歌～」

(参加者152人)

講師 あらかわ かおる 荒川 薫 氏 (童話作家)

赤ちゃんや小さな子どもに絵本の楽しさを伝えたい、でもどうやって伝えるの？と、私たちがとまどっていることを、わらべ歌の実践も交え、講師の荒川薫氏に以下のような講演をしていただいた。

赤ちゃんは絵本を喜ぶのか？と考える人は、絵本が知識を増やすもの、文字を教えるものと考えているようだ。勿論、本はそういった側面を持っているが、乳幼児にとって絵本は楽しいものであるべきだ。絵本の内容や文字を教えるというより、読んでもらうのがうれしい、声を聞くのがたのしい、赤ちゃんと一緒に絵本の楽しさを共有する・体験する、このようなことが赤ちゃんが絵本を楽しむ要素になってくる。また、赤ちゃんに読む絵本として、赤ちゃんにとってころよく楽しい言葉がある本、くりかえしの絵本、こちらに呼びかけてくるような絵本、明快な絵、温かさを感じる絵本を選ぼう。そして、ゆっくり、ゆったり、ころをこめて読み、聞き手と共に楽しんでほしい。この絵本の楽しさや読んでもらう喜びは、わらべうたの楽しさや喜びに通じる。わらべ歌にも絵本と同じようにころよさ・楽しさ・遊びがある。子どもは、機械の音では育たない。温かな人間の声で育つ。わらべうたは童謡と違い、言葉に自然についたメロディーとリズムで、分かりやすく、年齢に関係なく楽しめる。子どもを喜ばせながら育てるのが大人の役目だとするならば、絵本やわらべうたは大きな力となるだろう。

高度経済成長期にはわらべ歌がどんどんなくなっていった。時代は変わり、今またわらべ歌が見直されている。私たち大人がわらべ歌を身につけ、子どもと一緒に楽しみながら、絵本の読み聞かせと共に、次世代に伝えていけたらと思う。



荒川 薫 氏

第3分科会【子どもと読書】

「わたしの木、こころの木
～いせひでこの世界～」

(参加者380人)

講師 いせ ひでこ 氏 (絵本作家)

絵本『ルリユールおじさん』など“木”をモチーフにした作品を多く手掛けているいせひでこ氏を講師に迎え、「わたしの木、こころの木」の演題で創作にまつわる事柄や3.11以降に強く感じられている思いについてお話しいただいた。

いせひでこ氏は冒頭に「この講演では、作品の生み出し方とともに、絶滅危惧種の言葉についても話したいと思う」と述べられた。「今こそ言葉が大事なのではないか」「幼い頃に見た風景が原風景になって自分を支えてくれている」という言葉に象徴されるような、3.11以降の言葉や風景を見聞きして感じた事や考えた事が、強く伝わってくる講演会だった。

内容は主として、3.11以後創作された3作品～『最初の質問』『チェロの木』『木のあかちゃんズ』～が生まれるまでの経緯やその創作過程についてのお話だった。場内のスクリーンに作品を一場面ずつ映し出し、絵が生み出されるまでの背景や苦勞、そこに込められた思いを、詳しく語ってくださった。

福島出身の長田弘氏から「この詩を絵本化したい」と依頼を受けて創作されたという『最初の質問』に始まり、幾つかの作品が創作されるきっかけや、その創作過程についての貴重なお話を伺うことができた。

最後に話された『木のあかちゃんズ』は、創作されるきっかけの一つとなった出来事を紹介した上で、この作品は「未来があってほしい」と祈るような気持ちで作ったとおっしゃっていたことが印象的だった。また、同作品を飯館村の子どもたちへ贈った際、全員に違うメッセージカードを添えるために365種類あまりの絵を3日間で描き上げたエピソードを伺ったことも付け加えておきたい。



いせ ひでこ 氏

第4分科会【図書館資料】

「静岡の電子図書館を考える ～魅力いっぱい！地域資料の可能性～」

(参加者84人)

講師 豊田 高広 氏 (愛知県田原市図書館 館長)

助言者 平賀 研也 氏 (長野県伊那市立図書館 館長)

発表者 資料専門委員会

はじめに愛知県田原市図書館長の豊田氏より『公立図書館の向かうべき方向と電子書籍「お散歩e本」から見えてきたこと』と題し、電子書籍事業の報告と公立図書館における電子図書館の在り方について講演が行われた。

田原市図書館では「自立を助け、人がつながる機会を提供します」を目標に『地域』『自立』『つながり』をキーワードに各事業が行われている。田原市内で「お散歩」ワークショップを行い、成果をガイドブックとして、まとめた田原初の電子書籍が「お散歩e本」である。田原市と愛知大学の連携・協力に関する協定に基づく委託研究契約が結ばれ、平成24年度田原市「お散歩e本」刊行実験事業として行われた。また、地域の存在価値を目に見えらるるよう、地域に密着した新しい図書館の具体的なイメージを示唆し、未来の「司書」教育のモデルを提示することを目的とした。刊行実験の流れは、お散歩ワークショップを実施し、原稿執筆・映像編集・地図作成・書籍編集・電子書籍を制作し、電子書籍公開として、おひろめ会を実施した。この刊行で分かったことは、継続的な地域資料の収集と活用のために図書館がワークショップ、イベントなど「人の動き」をデザインすることが重要であり、電子書籍を図書館員が外部との協働により制作することも可能である。図書館の電子書籍事業は書店のようにベストセラーを貸出するサービスだけではなく、貸出総点数を競うだけでは図書館の可能性は見えてこない。地域資料こそ、公立図書館の個性の源である。デジタルアーカイブや電子書籍に注目すれば、地域資料の可能性は大きく広がる。電子書籍に関する経験と知識とスキルを蓄え、図書館の本格的な電子書籍化に備えよう。

次に、資料専門委員会から「静岡県の電子図書館を考える」と題し、電子書籍に関わる公共図書館の取り組み方について報告と提案が行われた。発表では、県立図書館の電子書籍プロジェクト、図書館界の動き、電子書籍関連業界の動きなどの報告と「静岡県内の公共図書館協同で地域資料を中心とした電子図書館運営を図る」という提案に至るまでの説明があった。商用コンテンツの利用は現時点では有効ではない。劣化や災害などで失われる可能性のある貴重書や地域資料の保存を優先すべきである。県市町協同での運営が効率的、経済的であり、資料の活用も広がる。今後は、運営組織の設立、運営方針、ルール作り、MLA連携、活用方法等の検討が必要だ。特に、電子図書館の効果を高めるためには、学校等での地域学習として活用が可能なこと、「富士山」「お茶」等の静岡県らしいテーマの魅力ある活用プログラムの作成、イベントや講座の開催などが必要である。最後に県立図書館に対し、協同運営の中心となり、電子書籍に関わる変化・進展にも対応可能なシステムを構築する要望があり、市町図書館には運営参加の呼びかけをした。

発表後、豊田氏より市町が積極的に実施するための目標・運営の仕方更なる必要があると助言があった。平賀氏より、アーカイブとは人々の記憶、これまでの情報のように図書館が"すべて"を集めようと思わず、アーカイブを作るのは誰なのか、地域の様々なプレイヤーを繋ぐことが大事であり、情報を利用する人が、どう利用するのかのイメージを持つべきだ、これまでの図書館の情報資料の蓄積・提供サービスや、"館"というウツワのイメージを外して考え、それぞれの地域らしい個性ある図書館づくりに活用してはどうかと助言があった。



豊田 高広 氏

第5分科会【読書活動】

「本、なぜ読むの？ ～21世紀、本と子ども・本とおとな～」

(参加者79人)

講師 鈴木 善彦 氏 (静岡文化芸術大学理事)

「読書県しずおか」の提唱者であり、県内の読書活動を牽引されてきた静岡文化芸術大学理事、鈴木善彦氏に21世紀を生きる子どもと若者、おとなに向け、なぜ人は本を読むのか、その原点を探り、改めて考える機会を提供していただいた。

「子どもは希望の存在」しかし今、子ども自身は様々な不安を抱えている。将来もまた希望に満ちているとは言えない。そのことを踏まえ、子どもの成長を支える読書について考えてみる。県の子どもへの読書活動は至る所で成果を上げているものの、子どもは忙しく、読書習慣まで根づいているかは疑問である。

玄田有史氏の本に、「子どもに希望をつくるには大丈夫と言う言葉が大事」とある。本は、それ自体が子どもに大丈夫をもたらしてくれるものではないかと思う。映画『風立ちぬ』を見ながら子どもにとって本は、正に風立ちぬではないかと思った。1冊の本は風を起し、子どもの心に今まで知らなかった景色、考え方、世界を届けてくれる。子どもたちは本との出会いの中でこの世は生きるに値すると思うだろう。それが正に希望。子どもには、「本があれば大丈夫」。皆さんのしている読書活動は子どもの心に新しい風を起している。

若者の活字離れが懸念されるが、決してそうではない。大学生の読書調査をしてみると、子どもの頃読んだ1冊の本が学生にしっかり根付き、そこから想像力、価値観、道徳観を獲得し自分の成長につなげていることが分かった。また、読書の楽しさも感得していることも分かった。小さい時読んだ本を自分の生き方、考え方のベースに取り込んでいるのに驚く。出会った本はIT時代を生きる若者の心の中に脈々と流れている。

豊かさの不確かさが同居している今の世の中、知恵をつけることが大切。そのためにも図書館を使いたい。図書館は、無限の可能性をもっている。様々な交流するのが図書館。

最後に「なぜ読むの？」に答える。それは、文化や英知を獲得するためである。21世紀こそ文化や英知を大切に作る時代であってほしい。子どもたちには本から「優しさ、賢さ、楽しさ」を得てほしい。齋藤孝氏は「欧米には聖書がある。日本人のアイデンティティーはたくさんの本を読んでできた。」と言っている。私たち日本人がなぜ本を読むのか皆さんなりに考えて欲しい。本というのは読者が手にした時からその人の本になる。もっと言えば、読者が作者になるのだと思う。



鈴木 善彦 氏

第6分科会【大学図書館】

「授業に“効く”学校図書館活用 ～今、学校図書館に求められること～」

(参加者123人)

講師 対崎 奈美子 氏 (東京学芸大学 特命教授)

国内外の学校図書館事情から最新情報まで、東京学芸大学特命教授・対崎奈美子氏にお話いただいた。「…学校図書館では限られた予算の中での選書が問題となる。子どもたちには知る権利があるが、知る権利が先行するのではなく、教育課程の展開に寄与することが大切であり、健全な教養を育成する、子どもたちの心を耕すものを学校図書館に置きたい。そういう本と子どもたちを、ここにいる皆さんにつなげていただきたい。

学校図書館活用の視点から指導要領を読み解き教科書を読むと、例えば社会科では地球儀を図書館に置き活用できる。『ソルハ』という本は児童文学であるが道徳や国際理解に使える。『科学の扉を開いた人々』は算数や数学の楽しさや良さを実感させる導入に、情報量の多い絵本『万里の長城』は美術の時間に。…子どもたちの心をしっかり耕し、心を育てなくてはいけない。『わたしのせいじゃない』は読み聞かせ、ディスカッションをしてほしい本で、子どもは手に取らないが、こういう本を読み聞かせする。教科書には図書館関連の題材が多い…」など、教科と関連した資料が幾つも紹介され、教員に対する情報サービスや公共図書館との連携のあり方、アメリカやカンボジアの学校図書館についても言及された。後半は迫りつつあるデジタル時代について、学芸大学で進められている『デジ読評価』プロジェクトを紹介された。「…2020年度までに児童生徒1人1台の情報端末による教育の展開が計画されている。それにともないデジタル教科書の導入が進展するだろう。司書教諭と情報担当は一緒に進んでいかなければならない。人的資源の組織化と意思形成が求められ、本を選定するようにデジタル教材を選定する。ICT教育を学校図書館との関わりの中で進めてほしい。学校図書館でタブレットを使う授業、時代が来る。」学校図書館が時代に取り残されないために、変化が求められていると熱く語られた。



対崎 奈美子 氏

第7分科会【大学図書館】

「やってみよう！ビブリオバトル ～知的書評合戦が大学図書館を活性化する～」

(参加者60人)

講師 岡野 裕行 氏

(皇學館大学文学部 国文学科 助教)

ビブリオバトル普及委員会理事兼東海地区代表)

発表者 利根川 奈々 氏

(静岡大学附属図書館 ビブリオバトルしぞーか代表)

ビブリオバトル対戦者

谷野 純夫氏 (静岡県立中央図書館長)

川原 弘子氏 (静岡大学農学部 学生)

大谷 優介氏 (東京工業大学大学院 学生)

知的書評合戦ビブリオバトルは "Library of the Year 2012" の大賞を受賞し、各地で普及が進んでいる。これを大学図書館はどのように活用すればよいのか、期待される効果や地域や図書館間との連携等、普及に携わる2名の方から講演をいただき、その後に実際にバトルを行った。

最初に、ビブリオバトル普及委員会理事兼東海地区代表である岡野裕行氏の講演をいただいた。ビブリオバトルの基本コンセプトは「人を通して本を知る／本を通して人を知る」であり、2007年に京都大学で誕生したものである。その後は各地で実施事例が増えており、自身が所属する皇學館大学でも、授業やゼミなどをきっかけとして、サークル活動、オープンキャンパス、大学祭など、教職員を巻き込む形での普及が進んでいる。また、「商店街ビブリオバトル」のように、大学と地域社会との協力による開催も実現している。ビブリオバトルは、①参加者同士で本の内容を共有でき②スピーチの訓練になり③いい本が見つかり④お互いの理解が深まるという機能がある。また、図書館でビブリオバトルを実施することには、①オープン性②パブリック性③ソーシャル性という3点の意義があると考えられる。大学という場で行うことには、①教員主体②職員主体③学生主体④地域連携⑤大学間交流という5種類の可能性が提案できる。

次に、ビブリオバトルしぞーか代表の利根川奈々氏から、所属する静岡大学での発案から企画、広報活動等実施までの具体的な流れと、県内の普及状況、また、今後の開催予定について、参加者のアンケート回答も含め、自身の経験に基づいた講演をいただいた。

最後にいよいよビブリオのバトルの実演となった。3名のバトルによる3冊の本の紹介プレゼンの後、参加者全員による投票によってチャンプ本を決定した。この日のチャンプ本に選ばれたのは、川原氏の紹介した『天野祐吉のことばの原っぱ』であった。



岡野 裕行氏、利根川 奈々氏

平成25年度 総会報告

平成25年度の静岡県図書館協会総会が、4月19日に静岡県立中央図書館で開催され、下記の7つの議案が承認されました。

- 第1号議案 平成24年度 事業報告の件
- 第2号議案 平成24年度 決算報告・会計監査報告の件
- 第3号議案 平成25年度 事業計画の件
- 第4号議案 平成25年度 予算の件
- 第5号議案 常葉大学附属図書館静岡水落図書館の加盟申請について
- 第6号議案 東海大学附属図書館沼津図書館の退会申請について
- 第7号議案 静岡県社会福祉協議会福祉情報センターの退会申請について

<平成24年度静岡県図書館協会役員>

- | | | |
|-----|--------|---------------|
| 理事長 | 谷野 純夫 | (静岡県立中央図書館) |
| 副会長 | 望月 利通 | (沼津市立図書館) |
| 副会長 | 大澤 眞明 | (静岡市立中央図書館) |
| | 佐野 清 | (富士宮市立中央図書館) |
| | 若杉 保彦 | (焼津市立焼津図書館) |
| | 相澤 美津子 | (菊川市立図書館菊川文庫) |
| | 曾我 廣秀 | (浜松市立中央図書館) |
| | 下山 義夫 | (清水町立図書館) |
| | 高松 良幸 | (静岡大学附属図書館) |
| 監事 | 渡辺 武資 | (島田市立島田図書館) |
| | 大石 弘美 | (掛川市立中央図書館) |

※加盟館名簿順

<平成25年度事業計画>

- 会議・大会
 - 理事会 第1回(4/19) 第2回(9月初旬・文書による決裁) 第3回(2/14)
 - 総会兼館長会(4/19)
 - 相互貸借担当者会議(5/16)
 - 静岡県図書館大会(10/28)

研修・視察

- 図書館基礎研修(5/9)
- レファレンス基礎研修(5/15・5/23・5/30・6/6)
- 児童・青少年サービス研修
- 大学・専門図書館研修(8/8)
- 情報サービス研修(10/22)
- 図書館運営研修(10/8)
- レファレンス応用研修(11/8, 予備 11/14)
- 総合研修(11/21)
- 県外視察(10月～12月)

出版

『職員名簿』・『県図書館協会No.64』・『静岡県図書館大会記録集』

専門委員会

- 資料専門委員会 年4回開催
- 図書館大会運営委員会 年5回開催

<平成25年度予算>

収入総額並びに支出総額3,636,000円の本年度予算が承認されました。

子ども読書活動で浜松市立天竜図書館と富士宮市市民読書サポーターが文部科学大臣表彰を受賞しました

文部科学省では、毎年、4月23日を「子ども読書の日」とし、記念事業として“子ども読書活動推進フォーラム”を開催しており、合わせて子どもの読書活動優秀実践団体に対する文部科学大臣表彰を行っています。平成25年度は、図書館の部で浜松市立天竜図書館が、団体(個人)の部で富士宮市市民読書サポーターが大臣表彰を受賞しました。

★～地域に溶け込む移動図書館車を目指して～ 浜松市立天竜図書館

山間地を抱える浜松市立天竜図書館では、移動図書館車での図書館サービスが大変大きなウエイトを占めています。平成22年9月の導入以来、区内の幼稚園・保育園、小中学校、社会福祉施設の約45箇所をほぼ隔月で訪問しております。中心市街地とは異なり気軽に近くの図書館を利用することができない皆さんにとって、貴重な機会を提供させていただいているのではないかと思います。しかし移動図書館車で提供できるサービスには限界がありますので、図書館窓口以上のきめ細やかな対応を心掛け、地域に溶け込む移動図書館車を目指してまいります。

(浜松市立天竜図書館 館長 高林俊介)



浜松市立天竜図書館

★～富士宮市の読書と読み聞かせを推進するために～ 富士宮市市民読書サポーター

富士宮市市民読書サポーターは、市の「読書と読み聞かせ推進事業」の立ち上げに際して公募により集まったメンバーです。行政が事務局として予算を執行し、市民読書サポーターが事業の企画及び運営を行うという市民と行政の協働形態をとっています。

子どもの本にかかわる講座や講演会を開催するとともに、小中学校・幼保・放課後児童クラブ等への語りやブックトーク、読み聞かせの実施、図書館や公民館での絵本の紹介、おはなし会などを行っています。

(富士宮市市民読書サポーター)



富士宮市市民読書サポーター

新設図書館紹介 函南町立図書館

町制50周年を迎えた平成25年4月7日、函南町民が待ちに待った町立図書館が、子育て交流センターとの複合施設「かなみ知恵の和館」としてオープンしました。函南町では、図書館開館と同時に「読書のまち・かなみ」を宣言し、町ぐるみで読書を通じたまちづくりを進めています。知恵の和館は、“赤ちゃんからお年寄りまで”世代を超えた様々な人々の学びと交流の場として賑わい、11月には入館者数が10万人を超え、図書館だけでも公民館図書室時代のほぼ5倍となりました。



函南町立図書館内部

建物は、延床面積2,803㎡の2階建てで、中央に吹き抜けのパティオがあり、全面ガラス張りです。明るく開放的な空間となっています。1階は「こども図書館」で、広々としたスペースに約3万冊の児童書が並び、床暖房を備えたキッズルームもあります。2階は一般図書室で、100席以上の閲覧席・個人学習席等を備えています。システムはクラウド型で、ICタグ、自動貸出機、BDSやライトカードも採用しました。また、県内初の読書記録シール機も導入し、お客様に大好評です。今後も、愛される図書館を目指して努力してまいります。皆さま、ぜひ一度ご来館ください。
(函南町立図書館長 佐藤れい子)

職員研修報告（公立図書館等職員研修） ※平成26年2月現在

例年、県内図書館職員の、専門的資質・能力の向上を図るとともに、県内図書館サービスの向上・発展を目指し、研修を実施している。図書館の枠を超え視野を広げることで、新たな発見をしつつ、参加者同士の情報交換も行えるよう努めました。

(1) 基礎研修

ア 基礎研修（基礎理論・実務）

期日/会場	平成25年5月9日（木）／ 静岡県立中央図書館		
参加人数	109人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「図書館職員の基礎知識」 静岡県立中央図書館 企画振興課長 渡邊 二三彦 「図書館サービスと著作権」 静岡県立中央図書館 調査課長 石村 俊樹 「～気持ちよく図書館をご利用いただく～接客とコミュニケーション」 コミュニケーションハウス 代表 坂倉 裕子 氏 		

イ レファレンス基礎研修

期 日	平成25年5月15日(水)/23日(木)	平成25年5月30日(木)	平成25年6月6日(木)
会 場	静岡県立中央図書館	静岡県総合教育センター	三島市立図書館(生涯学習センター)
【地区】	【中部地区】	【西部地区】	【東部地区】
参加人数	36人/36人	26人	24人
内 容	・「初級レファレンス」 静岡県立中央図書館 調査課 一般調査係(所 康俊、山田 直美、渡辺 勝)		

(2) 専門研修

ア 児童・青少年サービス研修

期日/会場	平成25年6月13日（木）／ 静岡県立中央図書館		
参加人数	54人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「百町森のお話の場合 ～年齢別の児童サービス～」 子どもの本とおもちゃ 百町森 代表 柿田 友広 氏 「子どもの認知発達と読書」 静岡文化芸術大学 准教授 小杉 大輔 氏 		

イ 大学・専門図書館研修

期日/会場	平成25年8月8日（木）／ 聖隷クリストファー大学図書館		
参加人数	39人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「聖隷クリストファー大学学術情報リポジトリの導入とラーニングモダリティの新設について」 聖隷クリストファー大学図書館 館長 平野美津子 氏 「学術コミュニケーションの最近の動向」 三重大学人文学部文化学科 講師 三根慎二 氏 		

ウ 図書館運営研修

期日/会場	平成25年10月8日（火）／ 島田市立島田図書館		
参加人数	30人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「明日の県立図書館 ～これからの図書館像を考える～」 三重県立図書館 副参事兼企画総務課長 平野 昌 氏 「島田市立図書館の取組」 島田市立島田図書館 館長 渡辺 武資 氏 		

エ 情報サービス研修

期日/会場	平成25年10月22日（火）／ 静岡県立中央図書館		
参加人数	18人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「タイタコーポレイションの地域に特化したサービス」 タイタコーポレイション株式会社 代表取締役 高松 多聞 氏 「静岡書店大賞の取組み ～情報を発信する読書人になろう～」 戸田書店掛川西郷店店長 高木 久直 氏 		

オ レファレンス応用研修

期 日	平成25年11月8日（金）	平成25年11月14日（木）
会 場	静岡県立中央図書館	
参加人数	26人	31人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「統計情報の探し方」 「レファレンスの回答・記録・共有」 静岡県立中央図書館 調査課 一般調査係職員 	

カ 総合研修

期日/会場	平成25年11月21日（木）／ 静岡県立中央図書館		
参加人数	38人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「図書館と発達障がい」 静岡県立こども病院 専門作業療法士 鴨下 賢一 氏 「障害者を職場へ受け入れる際の留意点」 県教育委員会学校教育課 特別支援教育室 伊賀 匡 氏 		

(3) 特別研修

ア 視察研修

期 日	平成26年1月23日（木）		
視察先	函南町立図書館／静岡ホビースクエア		
参加人数	24人		